
アイドルのありがちなストーリー？

春月桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アイドルのありがちなストーリー？

【Nコード】

N8593H

【作者名】

春月桜

【あらすじ】

ビジュアル系バンド「エルリックフライ」のファンの安須理沙。
理沙にはいろんな秘密があった。そして、「エルリックフライ」の

.....

色恋（前書き）

フィクションです！！

色恋

私は安須^{あす} 理沙^{りさ}。

「エルリックフライ」というビジュアル系バンドのファンである。

その人達はまだ売れていないがファンは結構いるほうなので、多分もうすぐで芸能界という扉を叩くだろう。

私はお金がないので、バイトをして何とか小さいライブハウスのチケットを買う。

でも、もうすぐで、生で見れる機会はなくなるだろう。

もう少し。

もう少しだけでいいから。

私から「エルリックフライ」を取らないで。

・
・
・
・
・

今日は「エルリックフライ」のライブ。

いつものように何とかやりくりして、貯めたお金をチケット売り場に持っていった。

ああ、また見れる。

あの声が聞ける。

あの音が聴ける。

私はいつもどおりチケットを買い、ライブハウスに入った。

ギター二つに、ベースギター、ドラム、マイク。

すべてが揃ってる。

この世に生きててよかった。

そんなふうにまで思えるこのバンド。

私がファンになったきっかけは友達に紹介してもらったこと。

何もかもが心に響いた。

ほとんど無表情の人達だけど、何故か楽しそうなんだ。

一日でファンになった。

このバンドにはみんな一人一人にファンがいる。

ギター1は藍^{あい}。

ギター2は舞^{まい}。

ベースは隼^{かい}。

ドラムは累^{るい}。

ボーカルは由^{ゆい}。

名前はみんな最後の文字が「い」で終わる。

＊みんな男です。

でも、私はこのバンド事態が好きだから、誰がどうだとかは無い。

そう思っていた時だった。

視界が光に満ちた。

その瞬間、一気に「キャーーーー！！！！！！！！」とい歓声が起こる。

私は後ろで眺める。

いつもそう。

好きだけど。

前に行くとは一回も思わない。

どうせ、近くにいてもどうにもならないし。

そんなときだった。

頬に無数の雫が流れた。

私はこの頃、同居している彼氏とうまくいっていない。

胸に響くこの切ない音楽は涙を押し出す。

いつも我慢している涙。

私は今の彼氏が浮気していることを知っている。

けど、好きという気持ちが少しあるのか、中々この縁を切れないでいる。

こんな自分に腹が立ってしょうがない。

悔し涙と、切ない涙が入り混じって、すごくしょっぱい。

バーンッ

そして、ライブが終わった。

私は一番最後まで残る。

いつもそうだ。

少し残っているぬくもりを感じるため。

後少しで、いなくなるかもしれないから、今のうちに。

私は頬に涙を流しながら舞台に手を当てた。

機械のせいで温かい床はとても、切ない。

そのときだった。

「何してんの？」

つぶっていた目を開けてその声が聞こえたほうを見た。

びっくりした。

驚きが隠せなかった。

近くにあの「エルリックフライ」のバンドの隼さんが私のことを見つめていた。

「え、あの、その……」

私は驚きでアタフタしていた。

鼓動がどんどん早くなる。

「何でお前毎回泣いてるの？」

その言葉に時間が止まったかのように思った。

毎回？

「私が毎回きてることを知ってるんですか？」

私はまた驚いた。

あんな華やかなところからあんな暗いところが見えるはずが無い
思っていたから。

「知ってる。それで毎回後ろで泣いてる。」

そんなのわかるんだ。

私は隼さんから目を逸らしながら言った。

「……色々。」

私の頬にまた雫が流れた。

何で、あんな人のために泣かなきゃいけないのだろう。

浮気なんかしてる人が悪いはずなのに。

なんだろう。

この切なさ。

悲しさ。

「ふーん。」

隼さんは私にそう一言言ってベースギターを持った。

私はうつむいた。

そのときだった。

頬に冷たい手があたった。

涙を拭ってくれる冷たい手は、心に温かくなって染み込んだ。

「「エルリックフライ」はもう少しでスカウトされちゃいますよね。」

私は冷たい手に私は自分の手を重ねた。

冷たい手はゴツゴツしてて、弦で出来た傷がわかった。

「もうスカウトされてる。後何回かでここもいなくなると思う。」

私は隗さんのことを見つめた。

後何回だろう。

三回？

二回？

それとも、一回？

この人達は私という場所が違う。

「そうですか…」

私は落ち込みながらつぶやいた。

そんなことはわかっていたはずなのに。

いざそうなると、やはり何か心に引つかかる。

「お前はもう見にこないのか？ライブ。」

妙に寂しそうに言うから、胸が軽く締め付けられた感じがした。

「行かなかったら寂しいですか？」

私はニヤニヤ笑いながら言った。

精一杯の強気。

「お前殴るぞ。」

隼さんはムスツとした顔で私に言ってきた。

「あはは、ごめんなさい。嘘ですよ。見にはいきません。ここが私のギリギリなんです。東京とか、ドームとかになるライブは行けないんです。」

私は苦笑いしながら言った。

もう少し。

後少し。

「そうか…じゃあ…」

隗さんが何かを言いかけた途端。

「隗ー！！！！遅いよー！！！！ってあれ？俺出る幕違った？」

大声を張って出てきたのはボーカルでちょっとやんちゃな由さんだった。

そして、後ろにはゆつくりと歩いてくるバンドのメンバーに私は驚きが隠せなかった。

「あれ？あ、毎回来てくれてる子じゃん。びつくりー。」

笑った顔が可愛くて、本当の女の子に見えた。

私と全然違う。

「由も知ってたのか？」

隗さんは少し不機嫌になりながらも由さんに尋ねた。

「あつたり前じゃん。可愛いなーって思ってたからさ。話してみたかったんだ。」

由さんは笑って隗さんの隣に座った。

「ふーん。」

隗さんは細目で言った。

すごい興味無さげ…

私は顔に汗をたらした。

「あ、隗と由、発見！！！逮捕ー。きゃははは。」

この可愛い人は藍さんだ。

やっぱりしゃべるとこういう人なんだ…

私は頷いた。

まあ、小さいし、ライブのときも毎回飛び跳ねたりしてるからわかるっちゃわかるんだけど…。

てゆうか、ぬいぐるみ持つてる…。

って、あ、あれ、私の大好きな眼帯ドロクロベア。

私は目を輝かせた。

しかもレアなもので当たることが困難とされてる、めっちゃ貴重なぬいぐるみ。

その熱い視線に気づいた藍さんは…

「このぬいぐるみ欲しいの？」

藍さんは可愛い顔で私に首を傾げてきた。

私は目を輝かせながら頷いた。

「じゃあ、あげる。」

私にいきなり渡してくれた。

え？

「これって、すごいレアですよ？」

私は受け取りながら尋ねた。

「いいの、いいの、確かに俺そのドクロベア好きだけど、家に何個もあるし。だから、いらない。」

レアなものがいっぱいあるってどういうこと？

私は疑問に思ったが、聞くのは止めといた。

私はもらったばかりのぬいぐるみを思いつきり強く抱きしめた。

「ありがとうございます！！藍さん。」

私はもらったドクロベアに頬ずりをした。

新品同様ののりの香りがした。

「取り込む中悪いんだけど、君時間大丈夫？」

すごい無口で有名な累さんが私に尋ねてきた。

私は我に帰り、円くて、真ん中に星が輝いている腕時計を見つめた。

時計の針は夜の十時を指している。

私は時刻を見て一気に温かくなっていた気持ちが引いてしまった。

その表情を見てなのか。

「どうした？」

隼さんが私に尋ねてきた。

私は無理矢理笑った。

「なんでもありません。じゃあ、そろそろ帰ります。」

私は重い気持ちを抱えながら歩き出した。

・
・
・
・

「あの子可愛いね。」

由がすごい鮮やかな顔で笑う。

俺にはあまりマネはできないものだ。

「あのぬいぐるみを抱きしめて笑った時はきつと俺の次に可愛いね。」

藍がそう確信していた。

藍は滅多に人のことを褒めない。

「それでも、藍のほうが可愛えんか。」

さっきまでは全くしゃべらなかった舞がそう興味無さ気に言った。

舞は関西出身だから、いつも関西弁だ。

「そつえばいつもはしゃべんない。累が今日は自分からじゃべつたね。」

由が不思議そうな表情をしながら言った。

累は由の目から目を逸らした。

「累ー！！今逃げたなー！！！」

相変わらず、元気な由は累に噛み付いた。

「つつつ！殺す。」

累が鋭い目つきでそつつぶやいた。

由はゆっくり、噛んでいた腕から離れた。

本当に犬だな。

俺はそんなバンドのメンバー達に呆れていた。

でも、確かに。

あの子は可愛いと感じた。

「隗も、あんまりファンの子としゃべらないのに……！何で隗が最初
にしゃべってたんだよ。」

由が俺に話をふってきた。

俺はめんどくさかったので…

「別に。」

俺はベースギターを持ちながら移動した。

「みんなしてひどくねー！？？」

由が一人で叫んでいた。

・
・
・
・

私がさっき嫌がった理由は…

「ねえ、彼女戻ってくんじゃないの？」

いつものようにリビングでそんなふうな会話が聞こえる。

もう帰ってきてるわよ。

私は怒りを心に押し込んだ。

「大丈夫。返ってきてたって、何にも言やしないよ。」

彼氏はきつと笑いながら言っているのだろう。

口調が軽かった。

いつもこう。

何でこんな人と同居なんてしたんだろう。

つくづく私は後悔した。

でも、実家にも帰りたくは無い。

私の唯一何にも考えないでいられるのは、「エルリックフライ」のライブの時だけなのだ。

だから、私には「エルリックフライ」は無くってはならないものなのだ。

でも、私がどうしようとも何もできないから。

私は一人、暗い部屋で月明かりだけを感じて眠りに着く。

この生活が変わることはあるのだろうか。

・
・
・
・
・

変わる。

どんどん変わる。

どうして、この人達と……

・
・
・
・
・

次に続く。

アイドルのありがちなストーリー2

朝いつもと同じ時間に起きて。

いつもと同じように一人で朝食を食べて。

いつものように勤めてるバイト先で仕事をして。

いつものようにあの寂しい家に一人で帰る。

今度はいつライブをするのだろう。

ああ、早く曲を聴きたい。

あの綺麗なバンドに浸りたい。

そう考えていた時だった。

ポンッ

いきなり肩を叩かれた。

私は叩かれたほうを向いた。

そこには思っても見なかった光景だった。

「隗さん？」

私はびっくりした。

メイクが薄く、髪が真っ直ぐなので驚いた。

「よくわかったな。」

隼さんも驚いた顔をしていた。

自分が叩いたんでしょ？

私はちよつと不思議に思った。

「まあ、ファンですからね。」

私は笑う。

「少し話したかったからここに来た。何時に終わる？」

ほとんどが上目線の隼さん。

でも、そんな隼さんはカッコイイと思う。

「えーっと七時くらいに終わると思います。でも、後二時間くらいありますよ？」

私は腕時計を見ながら言った。

こんなに待たせるのも悪いし。

「待ってる。」

隗さんはそう言つて、本が並ぶところに移動した。

すごい、悪い気がするんだけど。

何故か、いて欲しいと思つた。

何か、隗さんは私と通じるものを持つてゐるような気がする。

私は頑張つて働いた。

・
・
・
・
・

「すみません。待たせちゃつて。」

私は仕事が終わりに私服に着替え、すぐに隗さんに駆け寄つた。

「俺が待つてゐるって言つた。だから、謝るな。」

隗さんはそう言つて少し微笑んだ。

その隗さんの微笑みはとても鮮やかで。

綺麗だつた。

やっぱり、何か境界線を感じる。

・
・
・
・
・

「ねえ、あの人、ロン毛だけど、めっちゃかつこよくない?」

私と同じくらいの人が隗さんのことを見ながら、話していた。

相変わらず、今時の子ってキャピキャピしていて、可愛いと思った。

私とは、全然違う。

いつもそう思わせる。

「ロン毛ってそんな嫌なものか？」

いきなり隗さんが不思議そうに私に尋ねてきた。

私はいつもクールな隗さんがそんな顔をして、そんなことを尋ねてくるのがすごく面白くて。

「あはははは…」

私はお腹を押さえながら笑った。

ギャップがありすぎて、すごい可愛いと思った。

「そ、そんな笑うことか？」

今気づいたことだが、きっと隗さんは天然なんだろう。

「い、いえ。ちょっと、面白くて。あはは。まあ、そうですね…あまり、好む人はいないのかもしれませんがね。」

私は少し苦笑いをしながら応えた。

「そうか。お前もか？」

いきなり私にと言われたので、驚いた。

でも、少ししてうつむき…

「私はどちらでもいいです。私は本当に必要で、大切な人だったら、どんな格好でも、あまり気にしません。」

笑いながらそう言った。

「そうか。」

隼さんは安心したかのような声でそうつぶやいた。

私はそんな隼さんを見て首をかしげた。

街灯が二つ並ぶ人影を作った。

・
・
・
・

私と隼さんはいろんな話をした。

ほとんどは「エルリックフライ」のことだけど。

それはそれでとても話しやすかった。

スカウトのこと。

もう少しでライブハウスでのライブはできなくなることに。

夢のこと。

楽しい時間はすぐ過ぎてしまうもの。

「お前、時間大丈夫か？」

隼さんは私にそう尋ねてきた。

私は腕時計を見つめた。

針が示した時間は十時。

私は暗い顔になった。

「私は大丈夫なんですけど。隼さんが時間がダメですよね？」

私はあのとと同じ顔をして苦笑いをした。

その苦笑いに気づいたのかわからないけど。

「そうだな。でも、お前を送ってく。」

隼さんはそう言って、ベンチから立ち上がった。

私は暗い顔をして、ベンチから立ち上がる。

帰りたくない。

その言葉が何回も頭をちらつく。

・
・
・
・

すぐについてしまった。

いつもついている明りが今日は消えている。

私はそのときにすぐにわかった。

私は手が少し震えた。

「こんなでかいところに一人で住んでんのか？」

隼さんは私に驚きながら尋ねてきた。

「いえ。一応彼氏と。」

震える右手を左手で押さえつけた。

小さい声は微かに震えていた。

「彼氏……」

隼さんはそうつぶやいた。

私にはあまり聞こえなかった。

「それじゃ、さよなら。」

私は苦笑いをして手をふった。

本当は嫌だ。

私はカバンから鍵を探し出し鍵穴に差し込もうとした。

その瞬間だった。

知らない女の人の喘ぎ声が聞こえた。

私は手から鍵を落とした。

そして、頬に涙が伝わった。

冷たい地面にへたり込んだ。

ギュッ

そのときだ。

私は首に背中に人の温かみを感じた。

「今日は俺の家に来い。」

私の好きな低くて耳に響く声。

私は隼さんの手を握った。

・
・
・
・
・

ガチャッ

私と隗さんは何も話さずにただ手を握り締めるだけだった。

隗さんの家は一人暮らしにしては少し広かった。

ほとんどが黒と白で統一してある家の中は男の人の匂いなんかしなかった。

綺麗好きなのか、片付いている。

「どこでもいいから座って。」

隗さんはそう言って鍵をガラス張りの机に置いた。

私は適当に荷物を置いて、体を丸めて座った。

隗さんは何も言わずにコーヒーと紅茶を入れた。

隗さんは私に紅茶を差し出して、自分でコーヒーを一口飲んだ。

「ありがとうございます。」

私は小さい声でそう言った。

紅茶の温かい匂いが私の体の中に流れ込んできた。

私の好きなダージリンの紅茶。

そして、隗さんはコーヒーのブルーマウンテンを飲んでいる。

「この前もそんな顔をしていた。」

隗さんは口につけていたコーヒーカップをガラス張りの机に置いた。

やっぱり、隗さんにはお見通しなのかもしれない。

私と隗さんはどこかで繋がっているような気がする。

「私、彼氏が浮気してるの知ってるんです。でも、別れられなくてもう、全然好きじゃないはずなのに。でも、別れたら家に帰らなくちゃいけないし。」

私は紅茶を一口飲んで話した。

ダージリンの香りが口の中に上品に広がる。

温かい。

そう感じた。

「帰ればいい。」

隗さんはコーヒーを一口ずつ飲みながらつぶやいた。

「色々あつて帰りたくないんです。」

私は苦笑いしながら言った。

「そうか。」

隗さんはそれ以上聞かないでくれた。

それは、優しさだったのがすぐにわかった。

この距離がとても居心地がよくて。

甘えてしまう自分が情けなくなった。

私は眠くなり舟をこいでしまっていた。

その様子を見たのか。

「寝たかったら寝ていいから。ベッドで寝ろ。」

隗さんはそう言っただけで飲み終わった私が飲んでいたコップと隗さんのコップを片付けた。

やっぱり綺麗好きなんだ。

私は眺めながら瞳を閉じた。

ベッドの支柱に寄りかかりながら寝てしまった。

・
・
・
・

無防備だな。

俺はコップを洗いながら小さく寝息を立てている子のことを見た。

俺は濡れた手を拭きあの子の近くに歩いた。

名前も知らない。

性格もあまり知らない。

でも、何故か。

何故かこの子に引き付けられる。

気づいた時にはその子と唇を重ねていた。

自分がずるくてム力つく奴だと、今思った。

俺はその子が起きないようにベットに掬い上げた。

そして、その子の隣で眠りに着いた。

思った以上に温かくて。

どこか懐かしいような気がした。

髪の毛から花みtainな香りが漂ってきた。

・
・
・
・

光が目優しく広がっていく。

その光の中には綺麗な横顔があった。

女の人よりも綺麗なんじゃないだろうか。

私はその顔を優しく触れた。

滑らかで触り心地がとてもよくて。

綺麗。

私は細目で眺めた。

ん？

今何時？

私は腕時計を見つめた。

時計の針が指す時間は朝の九時だった。

私はベットから飛び起きた。

いきなり動いたので隼さんが驚いて起きた。

「何だ？」

隼さんが目をこすりながら私に尋ねてきた。

「私、バイトが。」

私は焦りながら髪の毛を結び直していた。

「お前、日曜日もバイト入れてるのか？」

隼さんが私にそう尋ねてきた。

私はゴムを取ったまま固まった。

ん？

日曜日？

「今日って日曜日ですか？」

私はゆっくり隼さんに尋ねた。

隼さんは鼻で笑い、カレンダーを指差した。

「なんだー。よかった。」

私はゆっくり座った。

ため息をつき、自分に呆れた。

「お前って本当に面白いよな。」

隼さんが私に微笑んだ。

その微笑を見て私も微笑んだ。

何だか、隼さんといるとホッとする。

「なあ、お前の名前教える。」

隗さんは私に命令口調で言ってきた。

私は一瞬ポカーンツとした。

少しして、気づいた。

「そういえば…言って無かったですね。私は安須 理沙です。」

私は微笑みながら言った。

「そうか。」

隗さんは微笑みながら言った。

その微笑はすべてを鮮やかにする。

私が自然に笑えるのはきっとこの人と一緒にいるから。

私は髪の毛を束ねようとしたときだった。

「おい。」

私は隗さんにいきなり呼ばれた。

私は首を傾げた。

「今日は髪結ぶな。」

隗さんは私のロングの髪の毛を愛しそうに手に絡めてきた。

その顔が私の鼓動を早く、そして大きくさせた。

心臓の音が隗さんに伝わるような気がした。

「か、隗さんはロングが好きなんですね。」

私は頬を赤くしながらそう言った。

その瞬間だった。

私と隗さんの唇が重なった。

私は一瞬驚いたが、ゆっくり瞳を閉じた。

甘い雰囲気が二人を包んだ。

温かくて頬に涙が伝った。

私は罪を犯した。

恋人がいるというのに、他の人の家に泊まり唇を重ねている。

やっと、答えがわかった。

私があの人と別れられないのは勇気がなくて、悪人になるのが嫌なんだ。

「わ、悪い。」

隼さんがいきなり唇を私の唇から離し、そう謝った。

私は頬に流れている雫を拭って。

「いえ。」

そう言った。

謝られたことで、少し胸が苦しくなった。

好かれない。

そう思ってしまったている。

固まった状態が続いていたときだった。

ブー…ブー…ブー…

隼さんの携帯のバイブが鳴った。

隼さんはその携帯の画面を見た途端。

「悪い。この部屋好きに使っていいから。ちょっと、出かけてくる。」

バンッ

隼さんは私にそう言い残してどこかに言ってしまった。

私は嫌な予感がしていた。

何故か、隼さんがどこかに行ってしまう気がした。

私は体を小さくして、うずくまった。

静かすぎて寂しい。

私は携帯を見つめた。

メールが一件届いていた。

そして…

やっと楽になれる。

そう思った。

「別れよう。」

その一言で肩に重く押し掛かっていたものが全部降りたような気がした。

よかった。

これでよかったんだ。

私はいつの間にか頬に涙が伝わっていた。

私は光をなくした瞳をゆっくりと閉じた。

寂しい。

そう思った。

・
・
・
・
・

誰もいないところに…

いつまでも、寂しさなんて感じないところに…

幸せって何処にあるの？

・
・
・
・
・

次に続く…

大切なもの（前書き）

これは、隗の物語の最終話です。

ですが、次には「アイドルのありがちなストーリー？」「舞」編
「」という小説を出すので、見てくれたら嬉しいです。

結構、無理矢理みたいに感じることもありますが、そこらへんは大目に見てください。

大切なもの

私はゆっくり瞳を開いた。

腕時計の針は午後の九時。

つまり夜。

まだ、隗さんは帰ってこない。

私は自分のカバンを持ち、隗さんがガラス張りの机に置いていた鍵を持ち、外に出た。

風が私の髪を撫でる。

久しぶりの感覚を感じたような気がした。

たった一日ぐらいのことなのに。

私は鍵をかけ、メモで鍵を包んで扉に挟んだ。

「さようなら。」

私は一言そう言って歩きだした。

・
・
・
・

どこへ行くっつ。

私はそう思いながら電車に乗った。

電車に揺られて何時間がたっただろうか。

私の周りに少人数しかいなかった。

いつでも、一人だった。

幼い頃も、同居の時も、そして、隼さんの家でも。

私には幸せになる資格が無いのかもしれない。

電車の窓の外を見つめた。

海が見える。

そうだ。

もう一人にならないように。

私は電車が止まった次の駅に降りた。

駅から少し歩いたところに海があった。

海の水面に綺麗に浮かび上がる月。

おぼろげで綺麗。

波の音が耳一杯に広がる。

私は頬に涙を伝わせながらそう思った。

私はゆっくりと海に近づいた。

「お母さんそろそろそっちに行くよ。」

私はそうつぶやいた。

海には胸ぐらいまで浸っていた。

もう少しで…

もう苦しい思いをしなくてすむ。

もう悲しまなくてすむ。

泣かなくてすむ。

ホッとした。

どんどん暗闇に自分の体が吸い込まれる。

意識が薄れ始めたときだった。

誰か来る。

目の前に広がったのは人影だった。

水の中で微かに目に映ったのは、やはりあの人だった。

どうしてもいつもあなたは私の近くにいろの？

私は薄っすら開いていた瞳を閉じた。

・
・
・
・

閉じていた瞳をゆっくり開く。

瞳に映ったのは満天の星空だった。

横には海を見つめている隼さんがいた。

「隼さん？」

私は小さい声で呼んだ。

いつも……いつもどうして？

私は切なくなった。

「どうして、あんなことをした。」

隼さんの声で怒ってることが一瞬でわかった。

低くて迫力があって。

そして、優しくて。

「もう……いなくなりましたかっただです。いつもいつも一人で。きっといなくなっても、誰も気づかないだろうと思って。」

私は座り、頬に雫を伝わらせた。

その瞬間だった。

ギュッ

隼さんが私のことを強く抱きしめた。

ミントのコロンの香りが海の潮の香りが混じり、はじける。

優しい風が体を包む。

そう感じたことが生きているということの証拠になった。

「寂しかったら俺のところに来ればいい。苦しかったら俺に抱きつければいい。悲しかったら俺の腕の中で泣けばいい。だから……だから、いなくならないでくれ。もうこれ以上大切な人を失いたくないんだ……！」

首に一粒の雫が落ちた。

その時に気づいた。

隼さんが泣いていることを。

私は隼さんの背中に腕を回した。

私よりも遙かに広い背中中は冷たくて潮の香りがした。

命がけで私のことを救ってくれた。

助けてくれた。

ありがとう。

私はもつと強く抱きしめた。

もう、一人は嫌だ。

・
・
・
・

私と隼さんは手を繋ぎながらゆっくり歩いていた。

何処へ行くのかはわからない。

そして、突然隼さんが話し始める。

「さっき、俺の御袋が亡くなった。」

隼さんが発した言葉に私は目を大きく開いた。

私は隼さんの顔を見つめた。

隼さんは私のことを一目見て、砂浜に腰を下ろした。

隼さんの頬に涙が伝っているのがわかった。

遠くを見つめる顔がすごく切なくて私の胸を締め付ける。

私もきつとお母さんが亡くなったときはそういう顔をしていたの
だろう。

今なら隼さんの気持ちもわかってあげられる。

私はしゃがんで隼さんを抱きしめた。

今の気持ちは私が一番わかってあげられる。

優しく、そして強く隼さんを抱きしめた。

隼さんは私の腰に腕を回した。

私の気持ちが隼さんに通じたらしい。

やはり、どこかで何かが隼さんと私は繋がってるのだろう。

「泣きたいときには泣いて置いてください。そうすれば、きっと明日には綺麗な朝が来ます。大丈夫です。泣き顔だって私が隠します。だから、思う存分泣いてください。」

私は隼さんの頭に頬をつけてそう囁いた。

ゆっくりでいい。

私が隼さんの力になれること全部やろう。

私はそう決意した。

「
ありがとう。」

小さくて聞こえないくらい微かな声なのに、私の耳に響いたのがわかった。

海の波が耳に響く。

周りにまた静けさが戻った。

・
・
・
・
・

ゆっくり瞳を開いた。

コーヒーの香りが部屋中に立ち込めている。

隣にはまだ少し温かいぬくもりがあった。

私は手をつき、起き上がる。

寝室からリビングが見えた。

隼さんがコーヒークップを両手で持ち、遠い目で窓の外を見ている。

私はあれから、隼さんの家にまたお世話になった。

隼さんがあの海にいたのは母親さんがいた病院がその海に近かったからだそうだ。

私も母が死んだ時がそうだった。

そして、憎しみが生まれた。

もうあの人のところには戻りたくない。

私は自分の父を親と思わないだろう。

あときの悲鳴がまだ耳に残っている。

私は耳をふさいだ。

嫌。

怖い。

その時だった。

「大丈夫か？」

隗さんが私の隣に来て顔を覗き込んできた。

私は隗さんに抱きついた。

憎しみと悲しみが胸の底から込み上げてくるのを必死に抑えた。

いつからだろう。

こんなに自分が弱くなったのは。

いつもは平気だったのに。

今は隗さんを頼りすぎてしまっ。

隗さんは優しく抱きしめてくれた。

そして、私の耳元で囁いてくれた。

「大丈夫。俺はずっとお前の隣にいる。そうだ、今後、俺の家で暮らせよな。」

隗さんの言葉に私は目を丸くした。

え？

私はゆっくり隗さんから腕を離れた。

私は真っ直ぐに隗さんを見つめて聞き返した。

「隗さんの家で？一緒に？」

私は恐る恐る顔を引きつった。

まさか……

「ああ、そうだ。お前、彼氏と別れたんだろ？」

私はまた目が点になった。

何故知ってるの？

「何で……」

私は啞然。

驚きが隠せるわけが無い。

誰にも話したことが無いはずなのに。

「そんなこと、誰にでもわかる。お前の行動パターンがわかりやすいからだ。」

隗さんは自慢げにそう言った。

私はガクツと傾いた。

あんまり答えになってない気がする。

私はそう呆れながらも笑った。

嬉しかったのは事実だし。

上から目線で言われたけど、いつものことだし。

それに悪いことを言ってるのでは無いから。

これからはきっと楽しくなるね。

・
・
・
・

一緒に暮らして二週間が過ぎた。

隼さんの家にも慣れて、いつも無表情だったバイトでも笑えるようになった。

いつも笑えるようになったのは、隼さんのおかげだよ。

ありがとう。

いつもその言葉が心に溢れている。

私はそんな幸せな日々を送っていた。

そんなある日だった。

隼さんにライブハウスでの最後のライブのチケットをもらって曲を聴き終わった時だった。

隼さんと私は話していた。

隼さんはライブで使ったものを片付けながら言葉を発してる。

そんなときだった。

「やっといた。安須 理沙。」

聞いたことの無い、低く暗い声が私の耳に響いた。

私はその声がしたほうを振り向いた。

瞳に映った映像は見たことの無い光景だった。

誰かも知らない人は怖い顔で私を見つめている。

「あの、ど、どちら様ですか？」

私はおどおどしながら尋ねた。

体が震えた。

変な汗をかいている。

「そっか、お前は知らないんだよな。あんなに小さかったからな。」

知らない人は光を失った瞳をしていた。

なんだろう。

この人おかしい。

「私の過去を知ってるの？」

私はまた尋ねた。

顔の筋肉が引きつる感覚がある。

憎しみを溢れている私の過去。

誰も知るはずが無い過去。

無くしたい過去。

忘れたい過去。

恐怖感が私の心を蝕んでいく。

「ああ。君のお父さんによくお世話になったよ……………」

知らない人はそう言って私に向かって走ってきた。

え？

ポケットから光るものが見えた。

私は思いつきり歯を食い縛った。

え？

痛くない。

ポタツ、ポタツ…

私はその瞬間心臓が止まったのが自分でわかった。

私の前には隗さんが立っていて、数秒したとき。

崩れ落ちるように倒れた。

どんどん広がる赤い液体。

「いややあああああああああああ……………」

「!!!!!!!!!!」

私にはそれ以上何も聞こえなくなった。

パニック状態に陥った私は気を失った。

外にはサイレンの音が鳴り響く。

・
・
・
・
・

隗さんは何とか一命を取り留めたらしい。

でも、私は隗さんに逢いに行けなくなった。

隗さんが入院して三ヶ月。

「エルリックフライ」のバンドのみんなには一緒に行こうと何回も誘われたけど。

また隗さんが巻き込まれるんじゃないかと思いい外に出ることを極端に拒否した。

電話や、メールはやり取りはできるのだけれど。

やはり怖かった。

私の父はやくざの組長をしている。

薬やらタバコやら危険なものまでに手を染めている。

私は一度も笑わない父が大嫌いだった。

そして、事件が起こったのだ。

私と母と父で初めての外食に行ったときだった。

父に放たれた拳銃が母の体を貫いた。

でも、その母を置いて父は自分だけ帰った。

私は母を呼んだ。

今でもその悲しみが心に蘇る。

体が震え、血の気が引いていく感覚は恐怖感というものを与えた。

染み付いて取れない叫び声。

人が逃げていく足の音。

次々と放たれた拳銃の弾。

人の生暖かい血液。

その怖い状態を小さい頃から繰り返し返してきた私はもうこれ以上ここにいたらおかしくなるところじゃないと思い、逃げてきたのに。

また、この状態に戻ってしまった。

やっと翼を広げた鳥にまた翼に傷を負わせた。

私はそのときにはもう歩き出していた。

外の風を感じることも無く。

無表情で歩いた。

憎しみの顔はきつと普通の人じゃないだろう。

・
・
・
・
・

ガチャッ

扉を開けるとタバコやらなんやらのすごく気持ち悪い危険な香りがした。

「あ、理沙さん。」

「おおー、めっちゃ綺麗になったなー。」

私はいろんな言葉を無視し、父の前に立った。

父は私を見るなり驚いた顔をした。

「理沙???お前、これまで何処行つてたんだ???!!」

父はそう言つて私にイスから立ち上がり近づいてきた。

私はポケットからナイフを取り出した。

「り、理沙？」

父は驚いた顔をまた見せた。

私は無表情のまま父に言葉を発した。

「あんたのこと、一度もお父さんなんて思ったこと無いから。」

私は目もあわせずにそう言った。

父は無言になった。

「笑わない。泣かない。怒らない。本当に心があるのかな？そう思ってた。でも、わかったよ。心なんてあんたには最初から無かったんだ。」

私の頬には涙が伝った。

「どうして、お母さんのお葬式に来なかったの？そんなに仕事が大変？お母さんよりも？？」

私は精一杯尋ねた。

涙が溢れながら必死で尋ねた。

教えて欲しかった。

父はゆっくり言葉を口にした。

「怖かったんだ。俺が殺した早苗《お母さん》を見るのが。何回も

仲間の死に様を見てきたが、早苗だけは怖かった。本当に心の底から愛していたから。仕事なんかよりも早苗と理沙が大事だった。本当は何よりも失いたくなかった。ごめん。ごめんな。」

初めてお父さんが泣いてるのを見た。

何回も歯を食い縛って涙を拭う父。

私はそつとナイフを下ろす。

本当は殺す気なんて無かった。

誰かを殺す勇気なんて私には最初からありはしない。

「お父さんに関わった人が私のところにきたよ。」

私はまだ目を合わせないままそう言った。

「え？関わった？」

お父さんは思い出せないみたいだ。

そりゃ、当たり前だと思う。

お父さんの組は人数が多いほうだから、何万人もいる。

「それで、私の大切な人が怪我をした。」

私は頬に涙を流し続けた。

もう失いたくない。

大切な誰かをなくしたくない。

その思いが体の奥から湧いてきた。

「大切な人っていうのは…お前の彼氏か？」

お父さんは心配そうな顔をした。

お父さんはこんなに感情豊かだったことを始めて知った。

「わからない。」

私のこの言葉にお父さんは首を少し傾けた。

「でも、すごく大切な人。あの人がいなくなるなら私もいなくなる。私にとってはいなくちゃならない存在。」

私はそう言った。

瞳を閉じた目にははつきりとあの人の微笑みが映った。

「じゃあ、俺は安心して死ねるな。」

私はその言葉に驚き、お父さんのほうに目を移した。

お父さんの顔は見たことの無い鮮やかさで微笑んでいた。

私は驚きで目を大きく開いた。

「ちゃんとお前を守ってくれる人がいるんだから。俺は安心だ。」

私はこんなに優しい人だとは全く気づかずに自分だけが不幸面して生きていたのかと思うととても情けなくなつた。

私はそのときすぐに悟つた。

お父さんはもう長くは無いと。

「お父さん。今までありがとう。」

私はそう言つて笑つてお父さんのところを出た。

もう何があつても大丈夫なような気がした。

・
・
・
・

カララララ...

引き戸の軽く鳴る音にみんなが目を向けた。

みんなで一瞬驚き、そして、みんなで喜んだ。

「よくきたな。ずっと待ってたよ。」

隼さんがそう微笑む。

私は泣きながら笑つた。

久しぶりにあった隼さんはイスを叩いた。

その光景が無邪気で可愛いと笑う。

私は隼さんが叩いたイスに腰をかけた。

そして、隼さんは私の正面に座った。

「左手出して。」

隼さんはそう言って優しく手を差し出した。

私は隼さんが広げてくれた手に自分の左手を置いた。

薬指に感じる冷たくて硬い感触は少しくすぐったかった。

「俺と結婚を前提に付き合って欲しい。」

隼さんは真剣な眼差しで私にそう言ってきた。

私はもちろん、笑って。

「はい！」

そう応えた。

悲しみはいつかは消える。

そう教えてくれたのは私の愛しい恋人。

・
・
・
・

エピソード

鳥のさえずりが部屋に響く。

今日から新しい日々が始まる。

「おい、この皿ってここに重ねておけばいいか？」

これから恋人の母親さんのお墓に報告に行く。

私と夫は一生を誓う。

そう伝えるに…

きっとこれから、楽しくなるね。

終わり
...

大切なもの（後書き）

「『隗』編」最後まで読んでいただきありがとうございます。
次の作品もお願いします。

違う作品もぜひ読んでみてください。

舞の恋（前書き）

この話は舞が主人公です。

話は繋がってはいるんですが、ほとんど、隼と理沙は出てきませんので、そこらへんはご了承ください。

舞の恋

つい最近になって隼と安須さんが結婚した。

この頃隼が笑うようになってきたのは、きっと安須さんと愛し合っているからだと思う。

俺はうらやましかった。

あんなふうに笑って一緒に歩み寄って行けることが。

俺にはまだいない。

大切な人。

そんなことを考えている時だった。

・
・
・
・

「あ、あれ？美兎^{みづ}？」

隼と一緒に前を歩いていた安須さんが足を止める。

安須さんが呼んだ先にはショートカットの子が佇んでいた。

「あーやつぱり美兎だ。」

ほわんとした言い方をした安須さんが美兎と言った人と抱き合った。

「みなさんに紹介しますね。こちらは「エルリックフライ」のことを教えてくれた明沢^{あけざわ} 美兎ちゃんです。」

安須さんがすごく嬉しそうな顔をして紹介してくれた。

明沢さんは俺達にペコッとお辞儀をしてくれた。

「美兎。「エルリックフライ」教えてくれてありがとうねー。」

安須さんはすごい嬉しそうな顔をしながら喋っていた。

あまり見たことのないすごく嬉しそうな顔はやはり可愛いなとは思った。

明沢さんは微笑みながら頷いた。

そして、かすれている声で…

「どういたしまして。」

そう言った。

すごく微かだから口で読み取ることしかできなかった。

背が少し小さくて、ロック系の服にチェーンやらネックレスやピアスなどがついている。

バックには缶バッジや安全ピンやいろんなのを付けている。

でも、全体がモノクロで統一されていて可愛らしい子だ。

「それで、美兎はこんなところで何してるの？」

安須さんがそう尋ねた。

ホンワリした言い方をするようになってきたのは最近になってから。

そういう喋り方の方が楽しんだそうだ。

「今日は「ブラウンショコラ」の観賞の帰り。」

明沢さんはまた微かな声でそう言った。

「ブラウンショコラ」というバンドは女性ボーカルと男性ボーカルの二人とギターとベースとドラムのメンバーで、少し特徴的なバンドである。

俺達は歌の種類が違うのでよくは知らない。

「そうなの？じゃあ、一緒に帰ろう？」

安須さんがそう言って誘った。

明沢さんは少し困った顔をした。

「でも、隼さんに悪い。」

明沢さんは隼に目を向けた。

この子は隗と安須さんの関係を知っているらしい。

隗は首をかしげた。

どうやら明沢さんの言葉が聞こえないらしい。

きつと聞こえてるのは俺ぐらいだろう。

俺はバンドのメンバー全員に呆れた。

「でも、美兎一人じゃ、危ないよ。」

安須さんが心配そうにそう言った。

安須さんがそう言った途端明沢さんはうつむいた。

俺はそんな光景を見て声をかけた。

「ほな、俺送つたるわ。」

俺は首を回しながらそう言った。

そんなめんどくさそうな光景を見てか。

「いい。」

明沢さんはそう言って顔を背けて歩き出してしまった。

「あ？何やあいつ。せっかく人が親切に…」

「美兎を悪く言わないでください。」

俺が話を話し終わる前に安須さんが切なそうにそう言った。

「どうして、そんなにあいつをかまうん？ほっときやいいもんを。」

俺は少し不愉快な顔をした。

「美兎には人にはあまり話せないことがあるんです。そのことを知ってるのは私や少人数の人達だけです。だから、私、今日は送っていきます。隼、ごめん。今日は先に帰るね。」

安須さんはすごい焦りながら明沢さんのところに走っていった。

俺はバンドのメンバーみんなに冷たい眼差しで睨まれた。

「す、すんまへん。」

俺は小さくなった。

安須さんはどうしてあの子にあんなにかまってるんやろか。

・
・
・
・

次の日だった。

「舞さん。昨日はすみませんでした。」

いきなり安須さんに謝られて驚いた。

メイク中の俺は笑えないので。

「大丈夫、大丈夫。俺全然気にしてへんし。」

軽い口調でそう言った。

それでも、安須さんはしょぼんとしていた。

俺は少し罪悪感がきりになって心を包んだ。

モヤモヤやゝ…

俺はそう苦笑いしていた。

「あまり気にするな。そんな顔をしてると舞が可哀想だろう。」

隼が俺の気持ちに気づいたのか安須さんの肩を叩いた。

安須さんはやはりモヤモヤしてるみたいで、まだ少し落ち込んでいた。

隼はそういうところが大人なのかもしれない。

俺も隼みたいにしたら大切な人ができるだろうか。

俺は少し考えた。

メイク部屋の隣から、累や、藍が音程や、音量の調査をしている音が聞こえた。

・
・
・
・

ライブも終わり、車までの移動をしていたときだった。

「あ、まただねー美兔ー。」

安須さんが鮮やかな微笑みで声をかけたのは明沢さんだった。

明沢さん元気に笑った。

「今日もどこかのバンドの観賞？」

安須さんは続けて尋ねた。

明沢さんは大きく頷き…

「「アラウンドレーベル」」

アラウンドレーベルはバラードが多く、歌声が空気に乗るのがフアンの中で絶賛されているバンド。

明沢さんはすごく嬉しそうな顔をしてそう言った。

ドキッ

俺の胸は大きく脈を打った。

やはり女の子の笑顔は可愛いからだろうか。

この感覚は初めてだ。

「今日も一人だね。危ないよ。」

安須さんが頬を膨らましながらそうつぶやいた。

明沢さんは笑って…

「いつも一人で来てる。」

そう言った。

安須さんが明沢さんにかける声のは必ず「危ない」という言葉が入っている。

一体何があるのだろう。

俺は気になった。

「それは、昼間とか夕方とかだからでしょ？でも、今は夜だもの。危ないから、また私が送ってく。」

安須さんがお母さんみたいな口調でそう言った。

「安須さん。今日は俺に送らせてくれーな。家までしっかり送ってくから。」

俺は前に一歩出た。

今、少し寂しそうにしてる隼は今日俺のことを助けてくれたし。

俺はいつちょやったるでーという感じでテンションを上げた。

「え、でも…」

「いい。」

安須さんが戸惑ってるときに明沢さんがムスツとした顔を微かに空気で話しながらそう断ってきた。

「安須さんも女性やから危ないのは一緒や、俺が行く。それに、隗にも悪いし。安心せい、手も足も出しゃーせんわ。」

俺は真面目にそう言った。

その真面目な雰囲気で気持ち伝わったのか…

「わ、わかった。」

空気に音で聞き取る言葉も面白いなと思った。

やっぱり声が出えーへんのな。

俺はそのとき確信した。

まるで探偵気取りだ。

「それじゃ、お願いします。じゃあねー美兎。」

安須さんとバンドのメンバーは手を振りながら見えなくなってい

った。

「さ、俺らも行こかー。」

俺は手をジャケットのポケットの中に突っ込んだ。

俺と明沢さんは何もしゃべらなかった。

てゆーか、明沢さんが言葉をはっしてくれなかった。

少しは反応せい！！！！

と思っていたが、結局は自分が悪かったことに気づきまた落ち込んだ。

そして、電車に入った時だった。

事件発生…

「お、あのときのやつじゃねーか。」

見覚えのあるチンピラどもがいた。

俺はこの前、絡まれていた女子高生の女の子を救った時に殴った奴らにここで逢ってしまった。

俺はこれはまずいかもとこめかみに汗をかいた。

そんなときに思ってたときだった。

明沢さんの手が震えていたのがわかった。

きつと気づかれないようにしているのだろう。

両手を強く握り締めていた。

俺は少し疑問に思った。

何故なら、普通の状態じゃ無かったからだ。

すごく怖いのか、小刻みに、大きく震えていた。

顔色がどんどん青白くなる。

「お、女もいる。お！結構可愛いじゃん。こんなやつほつとしてさ、俺らと遊ぼうよ。ね??」

一人のリーダー的な男が明沢さんの肩に手を置いた。

明沢さんは体を一回反応させた。

眉間に皺をよせながら目を逸らした。

「おい。その女に触るんじゃないやねえーよ。次の駅で降りろ。相手したるわ。」

俺の心にイライラした気持ちが出てきた。

何故だろうだろう。

こんなことにイライラしてる俺にも、イライラしたし。

いつもははっきりものを言う明沢さんがいつもみたいに言わないことにもイライラした。

何なんだよ。

そして、次の駅…

そして、数十分でまた電車の中に戻った。

相変わらず成長しない奴らだった。

また沈黙が俺らを包む。

でも、俺がその沈黙を破った。

「どうして、いつもみたいに断らへんの？」

小さい声でそう尋ねた。

電車の揺られる音に負けそうだったが、無事に聞こえたみたいで。

「少し前までバンドをやってた。そこそこ売れてたし、すごい楽しかった。何より歌えた。でも、ある日から声を失った。」

明沢さんは微かな空気の声で言葉を発していた。

今も少し震えているのが声でわかった。

「何で、声を失ったんや？」

俺は気になった。

何故だかは俺にも知らない。

でも、心が叫ぶ。

「教えてくれ」と。

「ファンのストーカーに襲われて。それ以来ライブの舞台に立てない。今度は何が襲ってくるだろうって、変な恐怖感が襲ってくる。」

明沢さんは悲しそうな表情をした。

きつと、歌いたいのだろう。

歌が大好きなのだろう。

「だから、いろんなバンドの観賞してたんやな。」

俺がそうつぶやいた後、明沢さんが小さく頷いた。

きつとまたあの明るい場所に立ちたいのだろう。

でも、それができないのだ。

そんなの生きてる心地がしないのは、バンドをやってるからこそわかることだ。

明沢さんから歌をとることは、俺のギターをとることと同じだ。

俺はそれ以上何も言えなかった。

このままだったらきつと一度も明沢さんの声が聞けないのだろうか。

何故か悔しかった。

・
・
・
・
・

きつとこのときに変わり始めた。

俺の人生は君の色に輝くだろう。

・
・
・
・
・

次が続く…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8593h/>

アイドルのありがちなストーリー？

2010年12月2日15時32分発行